

抗炎症薬で風邪の治りが遅くなる？

無作為化試験で示唆

風邪をひいたときに早期の回復を求めて医療機関を受診するが、風邪薬で早く治るのかわくは十分に検証されていない。2002年から2004年の冬季2シーズンに北海道から九州まで全国23のプライマリ・ケア医療機関で、解熱・鎮痛作用を持つ抗炎症薬であるロキソプロフェンの効果を世界初の自然感染患者に対する無作為割付の臨床試験で検証した。

発症後2日以内の風邪で受診した患者を無作為に「実薬群」と「プラセボ群」に割り付けて治療し、風邪が治るまで追跡した。なお、両群とも抗ヒスタミン薬であるメキタジンを併用した。その結果、抗炎症薬によって発症後3日までの重い風邪症状は軽減し、日常生活活動を制限した日数は2.7日から2.1日に減少したが、症状がすべて消失するまでの期間は逆に8.4日から8.9日に増加した。ただしこれらの差は統計学的に有意ではなかった。また副作用は実薬群で多かった（ただし主として併用薬の副作用）。

抗炎症薬は風邪症状を軽減するかもしれないが、早く治すどころかむしろ治りが遅くなる可能性があるため、漫然と使用しないよう気をつける必要がある。なお、この研究は2007年のInternal Medicine(日本内科学会機関誌)に掲載された。

